

はしてある。こゝで數世紀の時を經、恒河を降つて所を轉じ、パーラ Pallas 時代のベンガル風の降誕を見れば、作者は、誕生佛の足跡に、その七歩に對して七蓮を垂直に積み重ねてゐるのみでなく、佛母の足下にまでも、昔の様に蓮花がある。已に此の時代に、蓮花が一切諸佛の不變な特性を示す事となり、之が續いてゐる事も亦忘れてはならないのである。之に依つて、諸佛の超自然的な出生と其佛たる性質とを衆人に證するので、若し蓮花の用法が一般的になつたとしても、その舊來の象徴的價值に於て變る所はないのである。上來簡單に示すに止めた諸點について、佛教美術後代の發達は、其の極めて遠な起源に直接關係してゐるのであつて、其の不思議な存續を見て、こゝに述べた説に對して、更に論據を認めて頂ければ幸である。